

8. 里本江における葬送儀礼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 宏明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4903

8. 里本江における葬送儀礼

中 島 宏 明

- I. はじめに
- II. 葬送儀礼の様子
- III. 里本江と葬送儀礼
- IV. おわりに

I. は じ め に

私たちは、およそ10歳代から20歳代の青少年期に祖父母の死に出会い、40歳代から50歳代の壮年期に両親の死を迎える。そのような家族の死に対して、また地域や職場などでつきあいの深かった友人たちの死に対して、人々はいったいどのように対処してきたのだろうか、またしているのだろうか。また、自らもいつかは死を迎える。生あるものは皆死を迎える。「延命と祈るうちにも減る命」で、これは老境に限ったことではない。交通事故や自然災害などで、いつ命を落とすか分からない。人は常に死と直面している。こうした死と直接関係する葬儀は、人生のなかでも、最も重要なものの1つだと思われる。

本稿では、こうした葬送儀礼が、里本江においてどのように行われ、里本江の人々とどのような関係にあるかについて述べたい。そこで、先ずIIで、里本江で行われている、または行われてきた葬送儀礼についてとりあげ、IIIで葬送儀礼と住民の関係について考察していきたい。

II. 葬送儀礼の様子

ここでは、実際に葬儀はどのように行われているのか、または行われてきたのか、その順序や、人々による作業分担、それに死の忌みをめぐる観念などについて述べたい。里本江における葬儀は、志賀町に近代的な火葬場ができた1965年頃を境に大きく変わったと思われる。そこで、現在行われている葬儀を中心に概観しながら、昔（少なくとも志賀町に火葬場ができるより以前）のそれと比較し、昔のしきたりが現在ではどのように受け継がれ、また変容しているかについて述べていく。ここでの記述は、ある70歳代の男性からの聞き取りを中心にしている。

1. 死の予兆

能登地方のほとんどの集落では、鳥による死の予兆が、言い伝えられている。鳥がある場所で、普段とは異なった独特の「カワイ鳴き」と称される鳴き方で「カワイー、カワイー」と鳴

くと、村人は「また嫌な鳥が鳴き出したなあ」と言って、身近な人の安否を気遣う。また死の伝えを聞いた人々は、「そういえば、2、3日前から、鳥鳴きが悪かったのう」と言って、故人を悼む。里本江では、これを「カワイ鳥」と呼ぶ。その理由として、「人間は死ぬと鳥に生まれ変わる。鳥が「カワイ、カワイ」と鳴くのは、鳥が、生まれてきた自分の子鳥に言っているのであって、それは人間の死を意味している。」という言い伝えがある。また、「ガアー、ガアー」と鳴くと、空が荒れるという「荒れ鳥」の言い伝えもある。鳥はいつの世も、不吉な象徴だったのであろう。

2. 葬儀の準備

死を見届けると、家人は直ちに親戚や在所の班の家々に連絡をし、それによって集まってきた人々は、おくやみを述べると早速葬儀の準備に走りまわる。葬儀の準備は、全て班の人による役割分担で営まれ、家人は一切口出ししない習わしである。

班長が葬儀委員長となり、喪主や親族代表と相談しながら、また葬祭業者と打ち合わせをしながら、葬儀の進行を指示する。班の女性は主に葬儀中の食事の準備や手配を担当し、男性は、最近の例によると、接待・仏事係、火葬場係、弔電係、香典係などを担当する。接待・仏事係は、僧侶や弔問客の接待、僧侶の送り迎えなどを受け持つ。火葬場係は、火葬場の手配、準備、火葬場へ向かうマイクロバスの運転などを受け持つ。弔電係は、弔電を管理、整理したり、読み上げたりする。香典係は、香典の管理、整理、香典帳の記入などを受け持つ。香典の金額は、班によって決まっている。その他、弔問客の受付、案内、駐車場の整理など、手の空いている人達が受け持つ。各集落にある火葬場を使っていた頃は、薪割り係や、火葬係などがあつた。

料理に必要な野菜や米は、各家から持ち寄ったものだった。今でも少しは持ち合わせることもあるが、ほとんどは店から買う。葬儀委員長の奥さんを中心に、献立を考え、どこから何を買うかを決める。村にある店から均等に買うようにする。このとき、現金では払わず、買い物帳につけておいて、初七日を終えた頃に払う。料理は、肉や魚を使わない精進料理で、野菜や芋の煮物、天ぷら、ごまあえ、きんぴら、切り干し大根、酢の物、漬物、昆布料理などを作る。料理を出す皿や茶碗などは、班に用意してあるものを使ったり、各家から持ち寄ったりする。昔は、内側を赤く塗った輪島塗の食器を使う家もあつたが、輪島塗は手入れがたいへんで今では使われない。この料理の仕事がなかなかたいへんで、ごく最近になってからではあるが、手の掛かるものは業者に頼むようになった。もっと業者に頼もうという声もあるが、業者に頼むと費用がかかるという欠点がある。

死人が出ると、檀那寺に連絡しなくてはならない。里本江の住民のほとんどは浄土真宗大谷派の門徒であるが、里本江には、広覚寺、因宗寺、正久寺（ただし住職が常住するのは広覚寺のみ）という3つの浄土真宗大谷派の寺院があり、住民の約半数がそのいずれかの門徒である。

集まってきた人の中から、親戚の人や班の人が2人連れで寺へ行く。家を出るときは、死者の名前を呼んで「〇〇、お寺へ行かんかね」といって、縁側から出ていく。このとき、1升から2升の「御仏供米」(オブクマイ)を持参するが、その米を入れる袋は口を締めないか、締めてもわざと緩くする習わしである。また、この袋は寺で米を開けた後も、口を結ばないで納戸(ナンド)の柱に吊しておくものとされる。寺への道中は、寄り道をしてはならず、寺へ到着するとまっすぐに本堂の御本尊にお参りし、それから庫裏の僧侶に伝える。帰るときは、寺の境内は後ろ向きで歩く習わしである。

連絡を受けた檀那寺の住職は、枕づとめのお経「枕経」をあげに喪家に出向く。葬儀には、葬儀を出す家が里本江の寺院の門徒であれば、檀那寺の僧侶2人(住職、伴僧)、その檀那寺と「エンカリ」の関係にある寺院から1人、里本江の他の2ヶ寺(葬儀を出す家その他の寺の門徒であれば3ヶ寺)からそれぞれ1人ずつ、実家の檀那寺「コング寺」から1人、それから近くの寺院から1人か2人来る場合もあり、5、6人の僧侶が集まる。エンカリの関係とは、葬式やら何やらがあった場合に、お互いに応援を貸し借りする関係をいい、その関係は、あらかじめ決まっている場合が多いが、そうでない場合もある。エンカリの僧侶は、葬儀のときには、檀家寺の僧侶の次に焼香をする。因宗寺や正久寺の場合住職がないので、他の2ヶ寺としてよばれる場合、かわりに伴僧や親類の寺院に頼む。また、能登の寺院は11の組に分かれていて、富来町はその4番目の組「四組」(ヨンソ)にあたり、四組には29の寺院があり、それは更に6つの小会に分かれる。里本江の寺院はその6番目の小会「六小会」に属し、そこには8つの寺「八ヶ寺」(ハチカジ)があるが、近くの寺院から来る僧侶は、この八ヶ寺の寺院の僧侶であることが多い。

葬儀のときに僧侶が読経するお経は、「正信偈」である。正信偈には、8通りの読み方があるが、その1つが「板東節」として有名である。正信偈は、葬儀の他に、お講のときにも読まれる。浄土真宗には他に、「無量寿経」、「阿弥陀経」、「観無量寿経」といった「浄土三部経」があるが、これらは祠堂経のときに読まれたり、初七日には阿弥陀経、四十九日には観無量寿経、といった具合に使い分けられる。

3. 遺体の処理

死亡直後、死者の口に水を含ませる。このことを、「末期の水」とか「死に水」と取るという。末期の水をとらせるのは、釈尊が、臨終に際し水を欲しがったという故事による、といわれている。また、あの世への長い旅に出る者に対する、別れの水杯であるともいわれている。末期の水の取り方は、新しい筆の穂か、割り箸の先に新しい脱脂綿を白米で結びつけたものを、水を入れた茶碗に浸し、水を含ませ、唇をなでるようにそっと潤す。

その後、遺体の全身をふき清める「湯灌」をする。湯灌のやり方は、薬用アルコールを含ま

せた脱脂綿でふき清める。昔の習慣では、逆さに持った杓子「ソデジャク」で、水の中に湯を注ぎ適温にしたゆるま湯「逆さ水」を、遺体にかけて、この世にいた間のさまざまな苦しみや煩悩が洗い流されるようにと祈った。なお、全身をふき清めたら、汚物が出ないように、耳、鼻、口、肛門などに、脱脂綿を詰める。

湯灌が終わったら、故人が生前に好きだった衣服（着物は左前に）などを着せ、死化粧をほどこす。男性の場合は、ひげを剃り、髪を整える。女性の場合は、髪を整え、薄化粧をする。死化粧は、故人の姿を美しくしてあげたいという思いやりで、身内の手により心をこめてほどこされる。昔は、男女ともに髪を剃った。配偶者や子供が剃ってやるのが普通だが、生前に「俺が死んだらおまえが俺の頭を剃ってくれ」などと言われていた人が剃ってやった。頭を剃ってやった人は、7日間何にも触れてはならなかった。

今では、病院で亡くなることが多いので、衛生上または便宜上、ここまでは病院で済ませてしまう場合が多い。病院で遺体を清め、きれいにしてから家に運び、納棺まで安置しておき、そして納棺の前に改めて、遺族の手によって湯灌や、死化粧がほどこされる。さらに、湯灌や死化粧の準備は、昔は班の人達の手によってされたが、今では葬祭業者がおこなう。

死化粧そのほかの世話が終わったら、遺体を安置し、死亡の知らせを受けて来る弔問客を迎える。昔ながらの家には、仏間の近くに納戸（ナンド）とよばれる部屋があり、通夜まではそこに遺体を安置したが、今の家では仏間か適当な座敷に安置する。今は寝棺（ネガン）なので足を伸ばした状態であるが、各集落にある火葬場「野」（ノ）を使っていた頃は座棺（ザカン）であったので、遺体が硬直する前に足を曲げて安置した。遺体は「北枕」にするが、これは、釈迦が亡くなったとき、頭を北に向けていたという故事によるもので、「頭北面西右脇臥の姿勢」という。顔には白い布を掛け、手は胸のところで合掌させて、両手首に数珠をかける。掛け布団は天地を逆にして、裾を頭の方に向けて掛けた。刀のある家は、布団の上から遺体の胸のあたりに、魔よけのために刀を置く。『富来町史』によれば、これは「猫がまたぐとよくないことが起きるからだといわれ、猫は魔性のもので十二支のえとの中に入っていないから、人間との関係が薄いため…」といわれている。また、守り刀は刃先を下に向けて置く。それから、安置した遺体を外部から遮り、悪霊たちから守るため、枕元に屏風を逆さまにして立てる風習がある。これを「逆さ屏風」という。最近では屏風を持っている家が少ないので、逆さ屏風はほとんど行われていない。

この逆さ屏風をはじめ、水に湯をいれてぬるめる「逆さ水」、遺体に着物を着せるときの「左前」、遺体に掛ける天地逆さまの布団など、遺体の周りには日常生活のなかの普通のやり方とは逆のものがいろいろある。こうした逆さまのことが遺体の周りに多いのは、死は日常生活とは全く異なったものであるとの考え方による。日常と逆のやり方をするので、死にあやかるまいとする意味を持っているわけである。

遺体の安置が終わったら「枕飾り」をする。枕飾りとは、白布を掛けた木の台「枕台」の上に、香炉、燭台、花瓶（ケビョウ）の三具足（ミツグソク）や鈴などを置いたものをいう。花瓶にはシキビを供え、線香やろうそくは絶やさないようにする。これを「不断香」という。また枕台には「枕供え」を置く。枕供えとは、遺体に供えるご飯「枕飯」、団子「枕団子」、水などをいう。枕飯は、故人の死後すぐに炊き、炊いたものを全て、故人の愛用していた茶碗に山盛りにする。この際、一粒も残さないように盛り切る。これは、不幸を残して他人に分けないためである。山盛りご飯の中央には、故人が生前使っていた箸を突き立てる。枕団子の数は地方によって異なるが、里本江では49個だそうだ。通常は6個供えるが、これは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道地蔵に供えるという意味がある。また、「枕団子を食べると虫歯が治る」という言い伝えもあるが、これは、昔は結核などで死ぬことが多く、そうした死人の近くに置いてあった枕団子を誰も食べたがらなかったのもので、そう言って持っていかせたそうである。

遺体を安置し、枕飾りが整ったら、納棺前に僧侶を招いて読経してもらう。これを「枕経」という。

その後、納棺に移る。納棺する前に遺族の手によって、死装束が着せられる。経かたびらを着せ（実際には上から掛けるだけ）、頭には三角巾をあて、手足には手甲・脚絆・脚袋などを付け、六文銭（俗にいう三途の川の渡し賃）の入った頭陀袋を首に掛けた。死装束は、昔は遺族や班の人が縫うこともあったが、今ではすべて葬祭業者が用意してくれる。

納棺は、今は葬祭業者の用意した立派な寝棺で、しかも葬祭業者が手際よくやってくれるので問題ないが、座棺だった頃は硬直した遺体を棺桶のなかに納めるのも一苦勞だった。また棺桶も立派なものではなく、木の隙間から体液やなにやらが出てこないようにござを敷いた。疫病で亡くなった人は、ござの上に灰を敷いた遺体を納めた。

納棺の前に、病院で済ませてしまった湯灌などを、改めて遺族の手によって行うことが多いと先に述べたが、このとき里本江では、遺体に頭を刃物でそととなで、髪を剃る真似をする。これは、昔湯灌のときに頭を剃っていた風習の名残りで、ずっと形式化されている。

4. 通夜～葬儀

通夜は、亡くなった時間にもよるが、たいてい亡くなった日の次の日、葬儀の前日の夜に行われる。また、友引の日は避けるようにしている。

棺桶が祭壇に置かれ、通夜の用意が整うと、僧侶が読経しはじめ、その間に焼香が行われる。焼香は2回する。焼香のとき、里本江では、100円を紙に包んだものを供える風習があるが、昔は米を供えていた。なお、焼香は2つに折って横にして置く。

通夜の式が終わると、ほとんどの場合は通夜ぶるまいの席が設けられている。里本江ではこ

れを「オタイヤ」と呼ぶが、ここでは酒や、班の人達が作った料理、または料理屋に頼んだものなどが出される。それらをつまみながら、遺族や隣席の人と、故人の思い出話をする。弔問客が帰りオタイヤが終わると、後に残った身内のもので、ろうそくの火と線香の煙を絶やさないように見守りながら夜を明かす。

葬儀は、血の濃い身内の女性から焼香する「内葬礼」(ナイゾウレイ)から始まる。志賀町に近代的な火葬場ができる前までは、内葬礼が終わるとすぐに出棺である。遺族の手によって棺桶は、各部落にある火葬場「野」(ノ)まで運ばれ、そこで僧侶が立って読経し、男性が立て焼香する「野葬礼」(ノゾウレイ)が行われる。野葬礼が終わり次第、火葬に移る。

現在では、仏前で内葬礼が終わると、棺桶を外縁側に向けて置き直してから、野葬礼へと続く。この際、僧侶は畳の上で草履やスリッパなどを履き立って読経し、男性も立って焼香する。これは、火葬場の移転によって、従来のようなやり方や葬列などが不可能になったにもかかわらず、新しい状況にうまく対応して、なんとかその風習を受け継ごうとしているためと思われる。しかしこれは形式的になってきていて、本来の意味は薄れている。最近では、内葬礼、野葬礼の区別がはっきりしない場合もある。野葬礼が終わると、出棺である。

出棺の際、棺桶は遺族の手によって縁側から出される。玄関から出すと死者の霊が戻って来るといわれているからである。また、出棺の際に棺桶のふたが釘打ちされるわけだが、その前に棺桶のふたを開けて故人と最後の対面をする。対面が終わると、花や故人の愛用品などを棺桶に納め、ふたを閉める。

縁側から出された棺桶は、今は霊柩車に担ぎ込まれ、志賀町の火葬場へ運ばれる。昔の葬式においては、内葬礼の後、出棺し、野(火葬場)に行くまでの行列「葬列」があった。

葬列は、まず、遺影を持った遺族が1人、ついで、「紙花、死花」(シクワ)、「蓮」などの造花、「立花」(リックワ)などを持った遺族または班の人が数名が並ぶ。紙花は木の棒に紙を巻き付けた造花で、白、金、銀の三色ある。男性であれば白と金、女性であれば白と銀というように色を使い分けた。立花は季節の生花が使われ、その花は四十九日が終わるまで飾られた。その後に、血の濃い身内(子供など)4人が、さやをかぶせた棺桶を輿で担ぐ。その4人の足もとを照らすように、灯籠を竹の先につけたものを持った遺族または班の人が4人が並ぶ。その後に、遺族、僧侶、知人、友人、村人と続き、そして最後に班の人が後片づけをしながら葬列を見守る。

なお葬列の際、野に行くまでの道の曲がり角に、計6本のろうそくが灯される。まず、家から道路に出るときの曲がり角に2本、それから野の入り口に2本、どこか途中の曲がり角に2本と、その曲がる方向にろうそくが置かれた。それを「辻六道」という。「六道の辻に迷うな」といって、死者が道に迷わないようにという意味がある。頭陀袋のなかに入れる六文銭は、この辻六道を通るためのものともいわれている。このろうそくは、前もって班の人によって取り

付けられ、最後尾の班の人が片づける。今でも祭壇には6本のろうそくがあるが、これは辻六道を意味している。

浄土真宗では原則として位牌を持たないので、葬列のなかに位牌はない。浄土真宗の教義によると、故人は亡くなると阿弥陀仏の仏国「浄土」で生まれかわり、阿弥陀如来と同じ悟りを開いて、衆生を救済するためにはたらいていると考える。そのため、位牌に故人の霊が宿っているという考えはあり得ない。

5. 火葬～灰葬

霊柩車が家を出ると、血の濃い親戚や生前親しかった知人などが、後からマイクロバスなどで火葬場に向かい、最後の別れを惜しむ。僧侶は家で待っているか、いったん寺に帰るか、火葬場について行ってお経をあげる。また火葬場では、葬祭業者が雇った火葬場用の僧侶がお経をあげることもある。役員の手によって棺桶は釜のなかに入れられ、約1時間で火葬される。その間に班の人が用意したもので軽く食事を済ます。火葬が終わると骨上げである。

現在の志賀町での火葬は、上で述べたとおり、1時間程度で終わるが、集落にある野で火葬していたときは、遺族や班の人が一晩かけて焼いた。釜の底に割り木8束を編目に積み、その上にわら8束を敷き、その上に、輿から外した棺桶が置かれる。割り木は、普段の長さより長いので、火葬用に班の男が薪割をした。また、一度に燃え切らないように、生の木を半分入れた。棺桶は、遺体がうつ伏せになるように設置する。火をつける前に、参列者がわらを一掴み入れて、最後の別れを惜しむ。遺族によって火がつけられると、火葬役以外の人は帰宅する。帰り道は行きと同じ道を通って、寄り道をしなくて帰る。また、葬列のときに履いた草履は、火葬場か、途中の山などに捨て、裸足で帰ってくるという風習があった。この草鞋は他の人が拾って履くと、山や畑に行ってもマムシに噛まれないなどといわれた。家に着くと、班の人によって用意された塩と水で手を洗い、塩を振りかけて身体を清めた。

火葬する役には、班の男2、3人がなり、火の調節などをした。火葬にはそれなりの技術が必要で、うまく焼けなかったり、遺体の手足が伸びて遺体が釜から飛び出たりしたこともあった。うまく焼けないと成仏できないので、火葬役には経験者がついた。火がまんべんなくついたら、火が飛ばないようにむしろがかぶせられ、一晩かけてゆっくりと蒸し焼きにする。そして、翌日に骨上げを行う。

一度帰宅した後、一段落すると、遺族や班の男2、3人で再び野を訪れ、火の様子を見る。これは「ヒアンマイ」とか「シアンマイ」とか「野見舞い」とかいう。野見舞いから戻ると、皆で班の人が用意した精進料理を食べながら、故人の冥福を祈る。

遺体の火葬が終わると、今は、その後に骨上げだけすればよい状態で、遺骨が用意されているが、昔は、鍬などを用いて焼き釜から遺骨や灰をかき出し、水をかけてから骨上げを行う。

骨上げのやり方は昔から変わらず、竹の箸で骨を箸から箸に渡して、骨箱に納める。これを「箸渡し」というが、「橋渡し」に通じるところから、故人が、三途の川を無事に渡ることが出来るようにという思いが込められている。また、後日、本願寺の方へ納骨するための小さな骨箱を、別に用意する。骨箱は、白木で周りには白い紙が張ってあり、その上に法名（戒名、浄土真宗では法名（ホウミョウ）という）が書かれている。

今は火葬場に参列した人がそのまま骨上げをするが、昔の骨上げは翌日であったので、遠い親戚や知人は帰ってしまい、家族を中心とした血の濃い遺族が骨上げを行った。

骨箱を持って家に帰ると、僧侶にお経をあげてもらう。これを「灰葬」という。今では灰葬とはあまりいわないが、骨迎いの法要としてお経をあげる。このときに、初七日の法要を兼ねて行う場合もある。

灰葬が終わると、皆で班の人が用意した精進料理を食べながら、故人の冥福を祈る。この席では遺族は末席に座り、喪主は葬儀がとどこおることなく終了したお礼の挨拶を手短かに述べる。またこのとき、砂糖や野菜の形をしたまんじゅう7個などが配られる。

後片づけをした後、今度は班の人達の席が設けられる。この席では、喪主や遺族の人が班の人達にお礼をいってまわる。その後班の人達は、後片づけをして、そのまま家に帰るか、班の代表がお経をあげてから帰る。班の代表がお経をあげることを「ショウシンギ」という。

6. 死後の供養

葬式が終わり、他所から会葬した親戚の者もそれぞれ帰っていき、淋しさがひとしお身にしみる。死者のあった家では、忌明け（四十九日）まで、喪に服する。49日の間、肉や魚を一切食べずに精進を続ける者もいるが、仕事などもあるので、初七日を過ぎた頃には食べる。四十九日の忌明けまで、7日ごとに、初七日、二七日（14日目）、三七日（21日目）、五七日（35日目）、七七日（49日目）とお経をあげ霊を供養する。こうして故人を追憶しながらも、通常の生活にたち帰っていく。しかし一周忌が終わるまでは慎みの態度は忘れず、宮参りなどは遠慮し、正月の鏡餅も供えない。

初七日の法要は、最近では上で述べたように、骨上げの後に済ませてしまうことが多い。葬儀の後4、5日後に再び集まることや、故郷を遠く離れ都会に暮らす人が増えてきたことなどを考えると、このほうが便利といえる。

四十九日の法要は、忌明けの法要ともいい、親戚や知人などを招き、丁重に催される。四十九日の法要を終えて、忌明けを迎えたら、葬儀に来てもらった人や、香典や供物をいただいた人達に、あいさつ状と香典返しを送る。香典返しは、昔は砂糖などであったが、今はビール券が多い。形見分けもこの日をめどに行う。また四十九日が終わったら、僧侶にお経をあげてもらい、それまで自宅に安置していた遺骨を納骨する。

その後、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、五十回忌などの年忌法要が行われる。最後の五十回忌は弔い上げということで盛大に営まれる。

Ⅲ. 里本江と葬送儀礼

葬儀の準備のところでもみたように、葬儀はその裏で班の人達が支えている。志賀町に火葬場が移転するずっと前の葬祭業者があまり普及していなかった時代には、湯灌や死化粧、死装束の準備、祭壇の設置、葬列、火葬など、葬儀における仕事は全て班の人達の手によって執り行われてきた。葬祭業者が普及するようになると、湯灌や死化粧、死装束の準備、祭壇の設置といった仕事は葬祭業者に取って代われ、志賀町に火葬場が移転すると、葬列や火葬の仕事はなくなった。また、死亡する場所が自宅から病院へ変わると、本来自宅で行われるはずの湯灌や死化粧などが病院で行われるようになった。その点において、班の人達の負担は軽減されたと考えられるが、炊事係や接待係などその他諸々の仕事は今でも班の人達によって運営されていて、葬儀における班の人達の役割は相変わらず大きい。時代の変遷に伴って、駐車係などの新しい仕事も増えている。そうした中で、班の負担に関して、簡素化を求める声が多々ある。特に、主に女性が担当する炊事係は困難である。農家が多かった頃は、田植えの時期は別として、手伝いに行く時間があつたが、今は女性でも会社勤めなどをしている人がほとんどで、忙しいのである。しかし、いつかは自分も世話になることや、伝統風習を重んじるお年寄りの手前もあるし、費用のことなどもあって、なかなか不便を言い出せないのが現状である。

葬儀における班の人達の負担は、葬祭業者の普及、火葬場の移転、死亡場所の変化という3つの要因によって、軽減されていったと思われる。いつから葬祭業者が普及したかは定かではないが、これは葬祭業者が普及したから負担が軽減したというよりも、住民のニーズに答えるべく葬祭業者が普及していったものであると考えるほうが自然である。何から何まで班の人が取り仕切るのは、やはり相当な負担であつたに違いない。生業の変化による時間的余裕の減少、住民の意識の変化によって、また全国的な流れにのって、便利な葬祭業者は普及していったのであろう。生業の変化とは、パイロット計画によるタバコ栽培への移転、農業から会社勤めへの変化を指す。タバコ栽培は稲作よりも手間がたいへんかかるし、会社勤めになるとなかなか休めないということである。

火葬場の移転についてであるが、ここで一つ注目したいのは、隣の西海地区ではいまだに集落にある火葬場を使用しているということである。里本江の属する東増穂地区のほうが人口が多いこと、火葬場の老朽化、生業の違いなど、その理由は幾つか挙げられるが、問題は、里本江においても、集落にある火葬場を使用し続けることができたのではないかということである。

つまり、火葬場の移転は、不可避ではなかったのではないか。生業の変化によって時間的余裕が減少し、火葬や葬列といった仕事がかかりの負担になったのであろう。要するに、里本江では、志賀町に近代的な火葬場ができたことを機に、なかなか言い出せなかった、班の人達の負担の軽減を実現したのであろう。

さらに死亡場所の変化であるが、全国的にみると、志賀町に火葬場ができた1965年頃には病院などの施設での死亡者は、死亡者全体の約30パーセントほどであったのが、今では死者の約70パーセント以上が病院などで亡くなっている（厚生省人口動態統計による）。確かなデータはないが、里本江においてもこれに近い数字になっているだろう。福祉の充実、医療の発達ということを考えれば、これは当然の結果といえる。しかし、生業の変化による時間的余裕の減少によって、病人やお年寄りを自宅で介護できなくなったということも影響しているだろう。ともあれ、病人が死亡すれば、衛生上、病院で遺体の処理を行うことになり、班の人達の負担は減ることになる。

この3つの要因については、生業の変化による時間的余裕の減少、時代の流れ、といったものが大きな影響を与えているが、最近になって、第4の要因が押し寄せているのではと思われる。先に述べた最近の例で、葬儀のときに出される食事の用意で手の掛かるものが業者に頼まれた例がある。その時の葬儀委員長であったある班の班長は、「業者に頼んだのはこれが初めてである。これからは、ますますこうなっていくであろう」と言っていた。これも生業の変化による時間的余裕の減少、時代の流れ、といったことももちろん関係するが、近所ついであいという問題が新たに浮かび上がってくると思われる。今までにおいても、炊事の負担を減らそうと言う声はあったが、先に述べたようになかなか言い出せないものだった。しかし、ここにきてこういった例がみられるようになったのは、その理由の1つとして近所つきあいの重要性が低下しているということが挙げられるであろう。道路の整備にともなって、里本江には他所から新しい人達が入ってきた。また里本江では世帯平均人数が減少しており、若い夫婦中心のいわゆる核家族も増えている。そうした中で、近所つきあいの重要性が低下しているのであろう。

IV. お わ り に

葬送儀礼というものを1つの伝統風習という視点から見ると、その伝統性は失われつつあると思われる。内葬礼や野葬礼にみられるように、火葬場の移転という状況にうまく対応しているという一面もあると考えることもできるが、この変化も結局のところ自ら選んだ変化であって、新しい状況に対応しているというのも、結局のところ自ら伝統風習の重要性を破棄したとも考えることもできる。他にも所々で葬儀における伝統風習の名残をかいま見ることができるが、それらも簡素化され、形式化され、本来の意味が薄れているように思われる。そうした中

で、今後、伝統風習が廃れていくのではないかと思われる。特に、若者の伝統風習への関心の低下が気になる。伝統風習の1つとされるお講の参加状況を見ても、若者の姿、さらに中年層の姿も見受けられない。また、世帯平均人数が減少が、親子3代にわたる伝統風習の受け継ぎを困難にしている。しかしA氏(70歳代の男性)は、「若いときはそうでなくても、年をとれば自然と伝統風習やらに関心が出てくるものだ」ともいう。

今、里本江では、真宗の衰退をくい止めるため、広覚寺を中心に「同朋会」なる組織を検討中である。里本江の門徒70人から80人の会員で、真宗の研究をし、真宗の理解を深め、真宗を布教していこうというのが目的である。この会が、真宗の発展、そしてそれに伴って伝統風習の存続に、どれだけ寄与するか今後注目したい。そして、伝統風習を存続させようとする意識が、里本江における集団意識、近所づきあいというものに、どれだけ寄与するかについても注目したい。